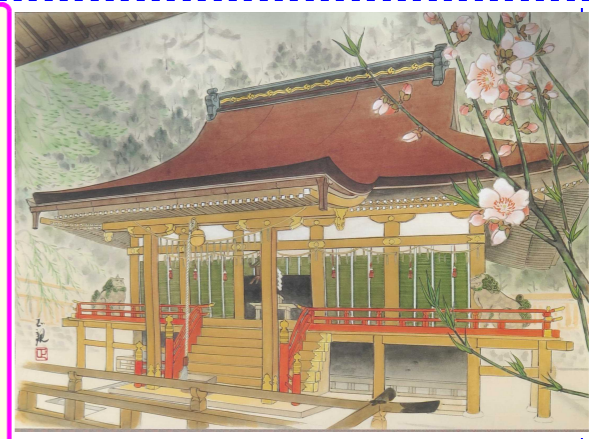


# ほとけの混和会だより

平成二十八年三月  
東光院  
仏の混和会  
第118号



比叡山のふもと、日吉大社の春

## お彼岸の中日は

寒さひとしおの日々で御座います。しかし「暑さ寒さも彼岸まで」ということばが示す通り春彼岸の頃ともなれば花だよりも、ちらほら聞こえて来るものと思われまします。さて彼岸とは、仏の世界に言い、争いも迷いも無い安心に満たされる境地です。それに對して、争い苦しみの絶えない迷いの境地を此岸と言っております。本年度はうるう年ですので、彼岸の入りは、三月十七日、

彼岸の中日は、三月二十日、彼岸明けは、三月二十三日となりまします。この七日間は、私達も迷いの岸を離れ安心に満たされる日々が歩めるように、仏様やご先祖様そして様々な人々にご感謝や懺悔の念を捧げ、素直な御心で、身を慎みながら、この世も来世も安心に満たされる極楽浄土となるように祈りを捧げるのです。そして祈りを捧げる方向が極楽浄土のご本尊様、阿彌陀如来様のおられる真西、ようにするに春分の日と秋分の日、太陽が真西に沈む日に祈りを捧げます。更に、春分の日と秋分日は昼と夜の時間が等しく、平等で、一方に偏らない日である事から中道の悟りを得る事を目的としました。お彼岸の中日は、お彼岸の入りから明けまでの真ん中の日という事では無く、中道の悟りを得る事を目的とした日なのです。それでは「中道の悟り」とはいったい何なのか、ほんの少しだけ触れてみたいと思っております。お釈迦様は釈迦国の王子と

して何不自由の無い快樂の極致を歩んでおりました。出家されて苦行の日々を歩みます。その後、六年間も壮絶な苦行続けたのですが、ある日突然苦行を捨ててしまいました。そして「快樂だけでは真の幸は得られない、苦行だけでも真の悟りは得られない。」と、「樂に非ず、苦に非ず」と、中道の悟りを会得されたのです。この釈尊の中道の悟りを、己の自信に当てはめて解釈してみると「正と邪」とか「善と悪」とそれこそ「苦と樂」などと様々な出来事や物を、己の都合に合わせ偏見の目で見て居ただけで、真の幸は得られない。よって快樂におぼれる事無く、頑張りすぎる事も無く更に他の比べる事無く、偏ったままの己、真の自己を見つめ、ゆったり生きなさいと言いう事かと思ひます。親鸞聖人は、「非僧非俗」僧侶のように聖人として清らかに生きられないが、俗人の用に欲望にまみれた生き方はしない。と宣言されました。これも釈尊の悟られた中道の精神で、まるで「真の自己を見つめ、無理せず、ゆったりと仏道を励みなさい」と論じて下さっているように感じ取れます。

私達は「何でこんな苦勞しなければならぬのか、何でこんな病氣にならなければならぬのか、なんでこんな不運に見舞われ無ければならないのか」などと物事を否定的に受け止めて、不平や愚痴をこぼしてしまひます。しかし否定的に受け止めていたのでは迷いの連鎖を繰り返し、苦しみの境地をさまよえばかりで何の解決にはなりません。物事全てを肯定的に受け止めて「すべてあなたのおかげです」と、をさはるみさんのように、御仏の導き「お陰様」と受け止める事が出来たならば、物事全てが貴重な経験として生かされて参ります。そして真の自己と中道の悟りを得て、安心に満たされる彼岸に至れよう努めて参りたいと思ひます。合掌 亮観拝

## 日本の仏様



前号では新年号と題し、天台宗と猿について紹介しました。今号より、昨年引き続き如来部、菩薩部、明王部、天部と毎号分けて日本の仏様について紹介していきます。

### ●菩薩部 弥勒菩薩

弥勒菩薩というと京都府広隆寺にある国宝の登録第一号としても有名な、右足をまげて左足の上に乗せ、右手を頬に当てて座っている姿が有名かと思ひます。

この弥勒菩薩とは将来、仏の教えが失った時代にこの世に生まれ変わり、悟りを開き人々を救い導く者になるとお釈迦様から預言を受けた実在した人物です。そのため、「未来仏」や「当来仏」とも言われ、今は兜率天と呼ばれる神々の住む世界で修行を行われています。



弥勒菩薩  
半跏思惟像

では、弥勒菩薩は何時悟りを開き、人々を導いてくれるのかというところ、お釈迦様が入滅してから五十六億七千万年後に兜率天からこの世に生まれ変わると伝えられています。この五十六億七千万年という数字は、私たちの住む太陽系が消滅する年数とほぼ一致するのだそうです。偶然の一致かも知れませんが、もし、お釈迦様はこの事を知っていて地球が消滅する最後の時、世界を救ってほしいと弥勒菩薩に託したのだと考えるとすごい事ですね。

そのような重大な使命を任せられた、弥勒菩薩は右手を頬に当て、人々を救済する方法を考えられているのかも知れませんが、余談：M78星雲の星の彼方からやってきた光の巨人こと、ウルトラマンはこの弥勒菩薩をモデルにデザインされたという話もあります。

言われてみると、微笑んだ口元や右手を右頬の脇に持つてくるなど、どこかなく似ているような気もありませんね。

亮澄拝



初代ウルトラマン

## 行節わかれ会したが



暦の上では春となりましたが、まだまだ寒い日々が続きます。皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

さて、去る二月三日東光院にて節分会が行われました。節分会では、蕎麦やフランクフルト等の接待、日教心経の誦読法要、年男女女による豆まきなどが行われ、天候に恵まれたこともあってか、大勢の方に参加して頂くことができました。

節分のイベント自体は多くの寺院で行われており、普段私がお世話に頂いている深大寺においても盛大に行われたとのことでしたが、地方の末寺格のお寺で、この規模の行事を行えることは当たり前なことではありません。

これはひとえに地域や檀信、総代役員の方々の協力の元になり成り立つものであって、



思います。取り合いになりがちな福豆なども自分より弱い人に向けてあげる。「ありがとう」の一言はとても気持ちのよいものです。亮敬拝

今回もお忙しい中、テントや舞台、その他設備の設置や片付け、当日の蕎麦打ち接待、受付などで尽力頂いた役員、関係者の方々、また、自ら栽培したお芋を前日遅くまで焼き芋用に仕込んでくださった佐俣さんをはじめ、横尾恵子さんはコロッケ二〇〇個を、横尾設備さんは焼き鳥を、小泉三千雄さんは野菜を、松山さんは漬け物を、その他大勢の方々が様々なものを無償で奉仕してくださいました。



通常節分等のイベントはお寺への集客を狙ってのものが多くですが、お寺で行なう行事の本意は、季節の行事を楽しむ交流を深めるほかに、他の幸を願ひ徳をつむことに意義があるように思ひます。単なるお祭りや終わることなく、自身の心に潜む鬼を除き、仏心や思いやりの心に触れられる場になればよいかと